

国語問題

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図があるまで、問題冊子さつしを開かないこと。
- 二、問題は二十四ページわたに渡っており、 で構成されている。
ページの抜けや印刷不備があった場合には、直ちに試験監督かんとくの先生に申し出ること。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

一

次の①～⑩の——線部について、漢字はその読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して書きなさい。

- ① 彼はすぐ文句を言う性格だ。
- ② コップに牛乳を注ぐ。
- ③ 彼は長い間、社長に仕えてきた。
- ④ 夫婦で洋食料理屋を営む。
- ⑤ インターネットで物を売買する。
- ⑥ 野菜を水できれいにアラう。
- ⑦ 学校までトホで行く。
- ⑧ 周りの環境をトトノえる。
- ⑨ シッパイは成功のもと。
- ⑩ この街は昔、炭鉱でサカえていた。

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

気持ちのいい、五月の下旬の日曜日。

フードコートでノートをひろげた希呼は、思わずうめき声を出した。

「けっこう、でかいな……」

急に、やりたくないという気持ちで【Ⅰ】がいっぱいになってきた。このままノートを閉じて、家に帰っちゃおうか。こんな人目のあるところで書いていくんじゃないかと、寝る前にちゃちゃっと自分の部屋でやろうかな、などと、ものぐさ精神が【Ⅱ】をもたげてくる。

それにしても、だ。

まさか自分が、自分から日記を書こうと思う日が来るなんて。

そもそも希呼は、文章を書く系の授業や宿題が大嫌いだ。作文はいつも書き終わらずに最後までぐずぐずしているタイプだし、小学校の卒業文集は改行しまくって、詩みたいなすかさずかしたものを提出した。夏休みの絵日記は絵にぜんぶの力をそそぎこんで、言葉はひと言葉だけ、「楽しかった」とか「花火をした」ですませたくらいだ。

友だちとの交換日記も、手紙のやりとりも、イラストでごまかしたり、言い訳を作ったりして、いつもうまいこと逃げてきた。

それくらい、希呼は文章を書くのが苦手だ。

なのにいま、真っ白なノート^①を前に、がやがやしたフードコートでひとり、頭をかかえてものを「書こう」としている。

それもこれも、希呼には深刻な悩みがあるからだ。

眠れない、とお母さんにはじめて言ったとき、「スマホばかり見てるからでしょ」とにべもなく返された。

「寝る一時間前には、液晶を見るのやめなさい。そうすればすぐ寝られるから」

希呼はすなおな性格だ。すなおでまじめ。

だからお母さんの言ったこともすぐにトライした。

寝る前にスマホを見ないようにして、テレビも見ないでまっすぐベッドに向かう日をつづけた。お父さんが映画を観ようと言っても、お母さんが笑える動画があるよと言いだしても、就寝時間の一時間前どころか、三時間前には、もう見ないと言いはって、ちらりと【Ⅲ】に映ることさえないように気をつけた。

けれど、いっこうに効果は出ず。

ベッドに横になっても、眠れない。

寝よう寝ようと思えば思うほど、これっぽっちも眠くならないのだ。

希呼はほかの方法もすべて試した。

夕方以降は部屋の電気を暗くしたり、寝る直前にあたたかいミルクを飲んでみたり。足首をあっためて、リラックスできる音楽をかけて、朝起きたら太陽を浴びるようにして。

ネットで検索して見つけた方法はあらかた試した。

それでも、やっぱりぜんぜん、眠れない。

眠れないというのは、人づてにきいて想像していたよりも、じつさい自分になってみると、想像以上にきつかった。

毎晩のようにベッドの上で寝返りを打って、毛布をたぐりよせたり枕の位置を変えたりした。頭の中をからっぽにしよう、慣れない瞑想を試してみたりもする。けれど、ふと時計を見ると、夜中の三時になっていたりするのだ。

気がつくとも朝になっていて、少しは眠れたのかなとは思うのだけれど、ぐっすり眠れた気がしない。そして学校に行く

ぼうつとしてしまつて、ろくに授業にも集中できず、先生に注意されてしまう。

希呼は困っていた。

本気でなんとかしたかった。

ネットで見つけた方法のうち、試していないのはこれが最後ののだ。

つまり、日記をつけること。

厳密には、日記というわけでもないらしい。A3判のノート三ページにわたつて、自分が思っていることをとにかくつらつら書きまくる、という方法だった。

外国の人が提唱した、自分の考えを明確にするための方法で、本当は眠るための方法論ではないらしい。ただ、これを試した人によると、夜眠れるようになった、らしいのだ。

~~~~~  
 どうやら、ノートにぜんぶ書き出すことで、頭の中の考え(注1)をアウトプットできるのがいいらしい。手書きで紙に書くことで、夜、ベッドの中でぐるぐる考えることがなくなるらしいのだ。

文章を書く、という苦手意識が先に立って、あとまわしにしつづけていた方法だけど、これ以上は先延ばしにできない。とにかく、希呼は夜、すつと眠りにつきたくてたまらなかつた。

そこで希呼は、休みの日、家の近くのイオンモールに入っている百円ショップでノートを買つてきて、そのままフードコートに行つてノートをひらき、うめいたのだった。

これに、書くのか。

えぐつ。

「A3つて、めちゃくちゃでかいな……」

ちよつとこれは、想像以上だった。

いつも使っているノートよりも倍以上大きいし、罫線けいが入つたノートを選んだせいで、字をできるだけ大きくしてごまか

す、という方法も使えない。

きまじめな希呼は、罫線を見捨てて大きめに書く、という方法には思い至らなかった。

② 希呼はちらりとあたりをうかがった。

フードコートには小さな子どもを連れたファミリーとか、ひとりで本を読みに来たおじいちゃんとか、ほかにもいろんな人がいる。だけど他人をじろじろ観察しているような人はいない。ノートパソコンをひらいて仕事をしているらしき人もいるし、参考書をひらいて勉強している高校生もいる。

家に帰ったら、どうせまた宿題やらごはんやらお風呂とかで、先延ばしにしてしまうにちがいない。それに、人に見せる文章を書くわけじゃないんだから。

希呼は覚悟を決めた。

カチカチとシャーペンのおしりをノックして、日付を書く。

さて、なにを書こう。と思った瞬間に、そうだった、と思い出して、こう書いた。

〈さて、なにを書こう。〉

これが、ネットで得た方法論に書かれていたことだ。

頭に浮かんだことを、とにかくそのまま、写し取るように書くこと。

とにかく書く。 **A** 書く。考えずに、書きまくる。A3なんて、とにかくでかいのだ。ひたすら手を動かさないと、

何時間かかるかわからない。

この方法論のいいところは、書いたものを、ぜったいにだれかに見せちゃいけないことだ。だから、どんなにバカっぽいことを書いても大丈夫。あとで赤ペンを入れる先生はいない。

〈それに、私の日記なんて読みたい人、いないと思うし。<sup>(注2)</sup>バド部の三人は見たがるかもだけど。あとで笑ってバカにするために。〉

③ そこまで書いて、手を止めそうになった。

だけど、希呼はえいやつとシャーペンを走らせた。

「ぜんぶ書いちゃう。そういう日記だから。バド部の三人、てっちゃん、シーボー、ミサ。あいつらみんな意地悪。私のこと、いじめてるわけじゃない。それはわかっているけどさ。だけどあきらるか、嫌がらせしてくる。近くを歩いたらかならず笑いだすし。感じ悪すぎ。私のことなんかほっときやいいの。私だってあいつらなんか嫌いだ。ううん、好きだったの。みんなのこと好きだった。なんで嫌いにならなきゃいけないの、まじで。サイアク。」

いつもなら、ここで手を止めていた。

こんなこと書いちゃいけない、と、いつもなら思っただろう。

あとでだれかに見られたら。あとでだれかになにか言われたら。そもそも、こんなことを考えているだなんて、自分で認めたくもない。

だけど、希呼はそのまま書きつづけた。

「そだよ。私はみんなのこと大好きだったのに。みんなで朝練、したかったな。みんなでフードコート来て、<sup>(注3)</sup>だべりたかったな。今日ここに三人はいない。いたらきつとサイアクな展開になってたはず。だけど本当はみんなと仲良しのまま、いっしょにここに来たかったんだ。いまだに、三人とやり直せたらって思ってる。そんなことムリだよ。たぶん、よけいキモがられるから、ぜったいできないし、言えない。悲しい。」

書いても書いても、A3のノートはなかなか埋まらなかつた。それどころか、やつと一ページ目の三分の一を埋めたと思つたときに、「まだある」と思っていた。

まだある、書きたいこと。私が夜、眠れない理由。

ここならだれも見っていない。いっぱい人がいるけれど、みんな自分の時間を過ごしているから。

だから、ぜんぶ書き出してやるんだ。<sup>④</sup>私の頭の中から、追っ払ってやる。

中学入学と同時に引越してきた希呼が、はじめ、学校に知り合いがなくて不安だったこと。けれど、仮入部ですぐに三人の友だちができて、ほっとしたこと。はじめはその三人と楽しくしていたこと。おしゃれなてっちゃん、てっちゃんと幼なじみだというシーボー、めちやくちやバドミンソンのうまいミサ。

四人はとてもいいチームだった。四人でペアをぐるぐる回して、バドミンソンの練習をいっぱいした。笑いまくったし、気があった、と思う。はじめのころは。

だけど B、へんな空気が流れるようになった。

はじめは思いつしかなと思つた。

希呼がなにか言つたとき、三人がしんとなることが増えた。スべつたかなとか、ちよつとタイミングが悪かつたかなとか、最初は軽く考えていた。

だけど、希呼がなにか言つて、三人がしんとしたあと、ミサが「ほんと、くそまじめだよね」と言つたことがあつた。すると、あとのふたりがくすくす笑いだしたのだ。

すごくいやな笑い方だつた。

⑤ 手に汗をにぎる、というのを、はじめて体験した。

その日をさかいに、三人は練習に希呼を誘さそつてくれなくなった。部活に行くと、三人が先に練習をはじめていて、希呼が近づいていっても無視した。希呼は途方とに暮れて、ひとりで練習をするしかなかった。ほかの一年生は、みんなそれぞれペアを見つけていたから、希呼が入る余地はなかつた。

バドミンソンは、偶数ぐうすうでない練習できない。たまりかねた希呼は、ある日直接、三人にそう言つた。けれど三人は、「ミサがうまいから、二対一だとちょうどいいんだよね」と言つて、やっぱりあの、いやな笑い方でくすくすしたのだつた。

希呼はいやでもわかつた。

三人は、もう、希呼のことを友だちだとは思つていないのだ、と。

それから、口もろくにきいてくれなくなった。それどころか、ひとりで練習している希呼を遠巻き(b)にして、ちらちら見ながら笑っていることも多くなった。

ほかのバド部の子たちも希呼たちの状況(きょう)をわかっていたはずなのに、だれもなにもしなかった。そりやそうだ。ミサはバド部のエースで、バドミントンがうまいというだけで、いちばんえらかった。だから、だれもなにも言えなかったのだ。

はじめのころは気にしないふりをしたけれど、もうムリだった。これ以上はつづけられなかった。それで、希呼はゴールデンウィークの前に、バド部を辞めた。

入部したときは、当たり前前に三年間つづけようと思っていた部活。

それが、けつきよく一か月もたなかったことに、まじめな希呼はショックを受けた。

けれど、それで終わらなかつた。

そのあとも、希呼は三人の視線を感じた。

そばにはいないはずなのに、三人のうちのだれかに見られているような気がした。希呼が追い出された(注4)グループラインで、三人に笑いのものにされているような気がした。

三人に言われたこと、なんとか関係を修復しようとして言ってみたこと、C 思い出しては、最悪な気分におちいつて眠れなくなつた。

あるとき、(6) ああ言えばよかつたとか、こう言っていたらよかつたのにとか、そんなことをいつまでも考えてしまつて、考えが止まらない。

それを、書いた。

そういうことをぜんぶ、希呼はノートに書いていった。

言われたことも、言ったことも、言えなかつたことも、言いたいことも、ぜんぶ。

ぜんぶ書いたのに、まだ、二ページ目の真ん中だった。

〈うそだろ。〉

希呼は笑いながら、頭の中に浮かんだ言葉をそのまま書いた。

〈まだ、ぜんぜんノートが埋まらないんだけど。え、待って。これ、まだ半分も書かなきゃいけないの？ 三人のこと、もうぜんぶ書きちゃったんだけど。まだなんか書き忘れたこと、あったかなあ。〉

すごくへんな感じだ。こんなことまで書くなんて。

だけど、頭に浮かんだことをそのまま書くのが、眠れるようになるために必要らしい。

〈私のこういうまじめなところを、三人は笑うんだよね。知ってまーす。で、毎晩あの三人のこと考えるせいで、眠れないんだよね。それもわかってまーす。わかっているけどさ、どうすりゃいいのよ。まじ、頭パンクしそう。〉

希呼はシャーペンのおしりをノックした。

うわ。右手が黒くなっちゃってる。

〈こんなにいっぱい文章を書くなんて、生まれてはじめてかも。手が痛くなってきた。でもまだ一ページと少しある。なんか書くことを思いつかなきゃ。ずっとこうやって考えことを書いてるの、アホみたいだし。〉

つらつら書いていたら、やっと二ページ目が終わった。

日記の中で喜んで、さらに書く。

〈お母さんもお父さんも、私が眠れてないことに気づいてるのかな。まあ、あれだけさわいでたし、たぶん気にはしてるんだろうけど、どうしようもないんだろうな。今日はゆっくり湯船につかってみよう。寝る一時間前くらいにお風呂入るといいらしい。この日記も書いたし、きつと眠れるはず。ちよつと希望、出てきた。〉

そこから、希呼は自分で調べた、眠れるための方法や、お母さんとお父さんのことを思いつくままに書き殴っていった。

希呼は、自分で自分にびっくりしていた。

ノートを買うときは、きつとあの三人の悪口でノートがいっぱいになるだろうと思っていた。それこそ、一週間くらいは、

三人のことだけ書いているだろうと思っていたのだ。

なのに、三人のことはたった一日目の半分で書き終わって、それ以上ネタがなくなった。

そしていつのまにか、

**D**

ちがうことばかり書いている。

〈お母さんもお父さんも、なんだかんだいっていい親だよ。不登校とかは許してくれなさそうだけど、理解はありそうなんだよな。だから、私は学校に行く。まじめですから。それに、あの三人に負けたみたいで、くやし。私って意外と、負けず嫌いなんだな。〉

それから、学校のクラスメイトのことを思いついて、それも書きつらねていった。

あの子とあの子は、仲良くしてくれる。

あのグループの子たちも、いつもにこやか。オープンな感じ。

バド部の三人とは、ちがうクラスだった。部活も辞めたから、接点はほとんどない。ときどき廊下ですれちがうときに笑われるのがいやなだけで、希呼は自分のクラスでは、普通にやっつけていけている。

〈私、けっこう平気かも。なんだかんだいって、無視してりゃいいんだから。お、なんだかポジティブな感じじゃない？

やったね。というわけで、今日はこのへんで終わり！ もうノートも残りわずか。すごい！ 私、書けるじゃん！ 作文も

これくらい書けたらいいのに。まあ、こんなとりとめもないことばつか書いているようじゃ、ダメだよ。ではでは、これで

本当に終わり！

三ページ目の最後のすみっこにびっくりマークを書いた希呼は、カチツとシャーペンをノックしながらノートにペン先を押し当てて、ふうつと息をついた。

「終わったー！」

うーんと伸びをする。ものすごい達成感だ。バドミントンで相手に勝ったときよりもやり遂げた感じがする。こんな気分、久しぶり。

スマホに手を伸ばし、時間を確認した希呼はぎよつとした。

「うそっ。一時間半もたつてんの？」

つまり、一ページあたり三十分もかけていたわけだ。

おそるべし、A3判ノート。

希呼はあらためて、自分の書いたページを見おろした。

眠れない原因だと思っていたバド部の三人への恨み<sup>うらみ</sup>つらみは、こうして可視化してみると、書いたうちの半分以下でしかなかった。びっくりだ。でも考えてみれば、三人とは四月の仮入部で知り合ったばかりだった。仲良くしていた期間は一か月もない。だから、書きたいこともこんなに少なかったのだ。

⑧ なあんだ、と思った。

あいつらのことなんて、こんなちっぽけなことだったんだ。

逆にいえば、三人だって、希呼のことをぜんぜん知らない。なのにあの三人は希呼のことをバカにして、ハブ<sup>注6</sup>にして、笑ってきた。

もし、いま、三人がいきなり改心して、希呼にあやまって、友だちに戻<sup>もど</sup>ろうって言うてきたら……希呼は、ちょっと距離<sup>きょり</sup>を置<sup>き</sup>くかもしれない。日記を書く前ならよろこんで三人を許しただろうけれど、いまの希呼は……たぶん、許しはしても、三人<sup>9</sup>のことはどうでもよくなっている。

それより、クラスにいる、ほかの子たちを大事にしたい、かも。

自分の書いた殴り書きをしばらく見つめたあと、希呼はノートをぱたんと閉じてカバンにしまい、席を立った。

眠れるようになるための日記のルールは、頭に浮かんだことをそのまま書くこと。そしてふたつめのルールは、

X

ことだ。

つまり解釈<sup>しやく</sup>によっては、自分で読み返すのだって、アウトってこと。

そうだ、読み返すことはない。なにしろ希呼はいま、最高にいい気分なのだから。

自分が書いたことをいちから読み直して、貴重な「いい気分」を台無しにするなんて、超がつくほどもったいない。希呼はさっぱりした気分です。フードコートをあとにした。

いまからベッドに入るのが楽しみだった。

今夜は、本当に久しぶりに、よく眠れる気がする。

(長谷川まりる『希呼の実験』)

(注1) アウトプット：おもてに出すこと。自分の考えや知識を話したり書いたりして表現すること。

(注2) バド部：中学校の部活動である「バドミントン部」を省略した言い方。

(注3) だべりたかったな：「無駄話をしたかったな」。「駄弁る」は「とりとめのないおしゃべりをする事」。

(注4) グループライン：複数人で同時にメッセージをやりとりする通信手段。

(注5) ポジティブ：物事に前向きに取り組み積極的な姿勢のこと。

(注6) ハブにして：「仲間はずれにして」。「ハブる」は「のけ者にする、遠ざける」という意味の若者言葉。

問一 【I】～【III】に入ることをばとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を使ってはいけません。

ア 胸      イ 舌      ウ 目      エ 首      オ 腕<sup>うで</sup>      カ 肩<sup>かた</sup>

問二 ——線①「真っ白なノート」とありますが、何をするための「ノート」だと「希呼」は考えているのでしょうか。「ためのノート」に続くように、本文中から二十四字で抜き出して答えなさい。

問三  
~~~~線 ㉑「にべもなく」・㉒「遠巻きにして」・㉓「とりとめもない」のことばの意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から

選び、記号で答えなさい。

㉑「にべもなく」

- ア とても心配した様子で
- イ 少し苛立ちを隠した様子で
- ウ なにも考えていない様子で
- エ 思いやりのない冷淡な様子で

㉒「遠巻きにして」

- ア 取り巻きからさらに離れて
- イ ぐるぐると回転しながら歩いて
- ウ 少し離れたところから見物して
- エ 気づかれないように物陰からのぞいて

㉓「とりとめもない」

- ア 難しく理解しにくい
- イ 筋道がなく、まとまりがない
- ウ 自分勝手に他人に遠慮がない
- エ 分量ばかりが多くて繰り返しが多い

問四
~~~~線 「どうやら」は直接どのことばにかかりますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

~~~~線  
どうやら、
~~~~線  
ノートに  
~~~~線  
ぜんぶ書き出すことで、
~~~~線  
頭の中の考えごとを  
~~~~線  
アウトプットできるのが
~~~~線  
いいらしい。

問五

——線②「希呼はちらりとあたりをうかがった」とありますが、「希呼」はなぜ「あたりをうかがった」のでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日記を書いている自分の姿が、周囲の人の注目を集めているのではないかと思ったから。
- イ 自分を仲間はずれにした友だちがそのあたりにいて、自分を見ていないかと思ったから。
- ウ フードコートでノートに何か書いていることを、お店の人に注意されるのではないかと思ったから。
- エ これからノートに書くことの手紙を、周囲を観察することで見つけられるのではないかと思ったから。

問六

A

D

に入ることはとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。同じ記号を使つてはいけません。

- ア いちいち                   イ べろべろ                   ウ そもそも                   エ だんだん
- オ どんどん                   カ ぜんぜん

問七

——線③「そこまで書いて、手を止めそうになった」とありますが、「希呼」はなぜ「手を止めそうに」なったのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 赤ペンを入れる先生がいけないことに不安を感じたから。
- イ バド部の三人について詳しく書くことに抵抗を感じたから。
- ウ 日記の書き方がわからず、書き出すことができなかつたから。
- エ 楽しい思い出しか思い浮かばず、面白い文章にならないと思つたから。

問八 — 線④「私の頭の中から、追っ払ってやる」とありますが、「希呼」は何を「追っ払って」やろうとしているのでしょうか。二十字以内で答えなさい。

問九 — 線⑤「手に汗をにぎる、というのを、はじめて体験した」とありますが、このときの「希呼」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 三人が練習に誘ってくれなくなったことを深く悲しんでいる。

イ 三人のことはもうどうでもいいのではないかと思いはじめている。

ウ 三人とまた仲良くするための方法をなんとかして探そうとしている。

エ 三人から仲間はずれにされてしまったことを確信して緊張している。

問十 — 線⑥「ああ言えばよかったとか、こう言っていたらよかったのにとか」とありますが、この内容と同じことを別の言い方で表現している部分を本文中から八字で抜き出して答えなさい。

問十一 — 線⑦「達成感」とありますが、このとき「希呼」は具体的にはどのように思ったのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 文章を書くことで眠れないという悩みを解決できると確信した。

イ 自分の気持ちを隠さずに思ったまま書き出すことができ満足した。

ウ フードコートにいる誰よりも充実した時間を過ごすことができ喜んで。

エ 誰にも書けないと言われていた日記を書き上げることができて優越感を感じた。

問十二 — 線⑧「なあんだ、と思った」とありますが、このときの「希呼」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号

で答えなさい。

ア バド部の友達とこれからは関わらないようにしようと思心がついて、落ち着いた気持ち

イ 文章にすることによってバド部の三人とのことを忘れることができ、せいせいした気持ち

ウ 自分がこれまで悩んでいたことは、書き出してみたら大したことではなかったと安心する気持ち

エ 書きたいことを全て書いたことで、ようやく眠れるようになるだろうと期待に胸を膨からませる気持ち

問十三 — 線⑨「三人のことはどうでもよくなっている」とありますが、「希呼」はなぜ「どうでもよくなつた」のでしょうか。と

思ったから」に続くように、本文中から一文を選んでその最初の四字を答えなさい。

問十四

X

に当てはまることばを本文中から抜き出して答えなさい。

### 三

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

コンピュータがどれぐらい人間に近づいたのか、人間と同じようにかしこいかの評価、判断はどうしたらよいか。この問題について、英国の数学者で、<sup>(注1)</sup>コンピュータサイエンティストの<sup>(注2)</sup>アラン・チューリングは、<sup>①</sup>チューリングテストと呼ばれるテスト法を考案しました。一九五〇年のことです。そのテストとは以下のようなものです。

人間(Aさん)が対話する二つの状況<sup>(注3)</sup>を作ります。対話相手が人間(Bさん)の場合と、コンピュータ(Cさん)の場合です。Aさんは別の部屋にるのが、人間なのか、コンピュータなのかはわかりません。声の<sup>(注4)</sup>違いでわかってしまわないように、会話はキーボードから入力され、ディスプレイに表示される文字でやり取りします。Aさんが別の部屋の相手と会話していて、それがコンピュータか人間かを判別できなければ、そのコンピュータは人間と同等であるとみなすというものです。

すごいアイデアだと思いますか。人間か人間でないかは、計算できるかできないか、文字が書けるかどうか、料理を作れるかどうか、といった<sup>(注5)</sup>いったらきりがありません。線引きはとても難しいのです。そこで、人間に見分けがつかなければ、それで十分かしこいといえるじゃないかというわけです。ここで<sup>②</sup>「見分けがつく」と「理解している」のは異なることに注意してください。

一方、<sup>(注6)</sup>哲学者の<sup>(注7)</sup>ジョン・サールは一九八〇年に、コンピュータが「理解している」かどうかについて、中国語の部屋という話を作<sup>(注8)</sup>って思考実験を行いました。それは次のようなものです(『心・脳・科学』<sup>(注9)</sup>土屋俊訳、岩波書店)。

いま英語しか理解できない人が、一冊の<sup>(注10)</sup>マニュアルと紙と鉛筆<sup>(注11)</sup>を持って部屋の中にいます。部屋には小さな窓があつて、部屋の外から中国語で書かれた紙が差し出されます。部屋の中にいる人にとっては、書かれているのはまったく意味のわからない記号列で、ましてやそれが中国語であることもわかりません。その人はマニュアルに従って作業していくと、そこに書かれている記号の並びから別の記号の並びができあがり、それを紙に書き写し、先ほどの窓から外に差し出します。これを部屋の外からは、中国語で書いた質問の紙をその部屋の人に差し出すと、<sup>(注12)</sup>答えが中国語で正しく返ってくるように見えるというもの

です。

果たしてこの部屋の人は、中国語を「理解している」といえるでしょうか。これをさきほどのチューリングテストで考えれば、合格、すなわち中国語を理解しているとなるでしょう。サールはここで、外から見ただけで、理解している、知能があるとするのは誤りであると主張します。このことをさらに広げて考えれば、コンピュータに A を持たせられるか、という議論にもつながります。あなたは将来コンピュータが感情や意識を持つと考えますか。

チューリングテストや中国語の部屋に共通するのは、コンピュータは私たちが通常人間に対して考えている「かしこい」「理解している」「翻訳ができる」という状態とは異なるということです。しかしながらそれらの機能や結果を私たちの生活に役立てることはできません。人間に比べコンピュータは、膨大な記憶力<sup>おぼ</sup>をもち、高速に計算ができることから、その利用はさらに進んでいくと考えられます。未来がそのように進んでいくとすると、人間にしかできないことは何なのかが気になってきます。次章ではそのことについて考えていきたいと思います。

ちょっとその前に、日本で話題になったAI研究のお話と、現在どんなデジタル技術があるかまとめて見ておきましょう。<sup>(注6)</sup>  
みなさんが日々の学習を振り返り、近未来を想像するのに役立つことでしよう。

東ロボくんを知っていますか？ 東ロボくんは、国立情報学研究所が中心となって二〇一一年から行われているAIの研究開発プロジェクトです。二〇一六年度までに大学入試センター試験（現在の大学入学共通テスト）で高得点をマークすること、二〇二一年度に東京大学に合格する能力を持つことを目標として始めました。このプロジェクトの目的はそもそも、東大に入るのではなく、AIの可能性と技術の限界を見定めるための取り組みとしてスタートしました。その当時のAI研究者の八割は合格できると考えていて、研究に参加したのは「できない」と考えたメンバー<sup>③</sup>だったそうです。

このプロジェクトで研究開発が進められる中、二〇一五年一〇月にAIの囲碁プログラムであるAlphaGo（アルファ碁）が人間のプロ棋士に勝利しました。そこから「AIが囲碁で勝てるなら年間三〇〇〇人合格者が出る東大に入学できる」と確信

に変わったそうです。

入試問題を解くためにはどんなAI技術が必要でしょうか。前章で紹介したIBMのWatsonは、まず問題文の形式をつかんで、データから統計をとって穴埋め問題に回答しています。読解しているわけではなく、学習した重みづけにしたがつて判断しているだけなのです。

スマートスピーカーのSiriは、「この近くのおいしいイタリア料理の店を教えてください」と言うと、答えを提供してくれます。これはスピーカーの位置をGPSで得て、「イタリア」「料理」「おいしい」などのキーワードを拾って検索し、結果を出しています。したがって、「この近くのまずいイタリア料理の店は」と尋ねると、探せないというのは有名な話です。

東ロボくんも文章を読んで理解しているわけではなく、統計的に判断しているので、統計がうまく使えない正誤判定問題や同義文判定、小論文は苦手だそうです。そのレベルの東ロボくんが、代々木ゼミナールの模擬試験「東大入試プレ」二〇一六では数学の偏差値は七六となり、ベネッセの五教科模試だと偏差値が五〇から五五。七五六大学中、五三三大学に合格できる結果が出るまでになりましたが、このあと東ロボくんの成績はB打ちになりました。

ここでこのプロジェクトリーダーの新井紀子さんの頭の中に一つの疑問が浮かびます。言葉の意味を理解していない、読解をしていないAIが七五六大学中、五三三大学に入学できる成績になってしまっている。これはAIがかしくなったというより、実はほとんどの中高生は問題文が読めていない、理解していないのではないかと。読めなくても合格してしまっているのではないかと、というものです。

④ この考えを検証するために二〇一五年に開発されたのが「リーディングスキルテスト」です。小六から社会人までのべ二万五〇〇〇人を対象に行いました。問題はすべて選択式で、読解力さえあれば、その問題に関する知識がなくても解くことができるのです。その結果、中学生、高校生もAIと同程度の読解力しか持っていなかったことが判明しました。

そこで新たな研究の目標「中学を卒業するまでに全員が中学の教科書を読めるようにする」が生まれました。このお話は既に複数の書籍が出版されているので、興味のある方は読んでみてください。

ここで東ロボくんプロジェクトを紹介したのは、AIの研究の目的はかしこいコンピュータを作ることにとどまらない、ということを知って欲しかったからです。<sup>(注11)</sup> 深層学習では、結果さえ良ければそれでよいという運用がなされており、AIが解答を出すまでどのような処理が行われているかがわからないのが問題です。なぜそのような結論を出したのかを個別に説明できないことが多くあり、その点を改善していこうとする研究も進められています。

また、AIを研究開発するために人間の知的活動のメカニズムを想定し、モデルを作り、コンピュータでシミュレーション<sup>(注12)</sup>をしてみると、シミュレーションができない、未知の部分があることが見えてきます。そこから新しい実験、新しいモデル<sup>(c)</sup>創出の重要なヒントを得られることがあります。またそこに残された難しい問題は、人間の本来に人間らしい、非機械的側面の発掘<sup>(く)</sup>となり、人間についてのより深い洞察<sup>(d)</sup>につながるということです。AIの研究には二つの側面「かしこい機械」と「C」の探究があるのです。

<sup>(5)</sup> この東ロボくんの研究は、人間のかしこさならぬ、人間の学び方の問題、キーワードだけを拾って回答してしまおうとする、「点を取る」「入試に合格すること」<sup>(注13)</sup>にチューニングしてしまった学習の問題を明らかにしたのです。読者のみなさんも、自分の勉強法について振り返ってみてください。

(美馬のゆり『AIの時代を生きる』)

(注1) コンピュータサイエンティスト：コンピュータの仕組みや情報技術などの分野を研究する学者。

(注2) アラン・チューリング：イギリスの数学者。電子計算機の開発者。(1912～1954)

(注3) ジョン・サール：アメリカの哲学者。言語哲学について研究した。(1932～2025)

(注4) 思考実験：頭の中で見当をつけて考えを深め、結論を導き出すこと。

(注5) マニュアル：取り扱<sup>あつか</sup>い説明書。手引き書。

(注6) AI：人工知能。人間と同じような知的振る舞<sup>ま</sup>いをする機械のこと。

(注7) Watson：コンピュータ・テクノロジー企業であるIBMが開発したAIの一種。人間の意志決定を助ける役割を果たす。

(注8) スマートスピーカー：話しかけることで様々な操作をすることができる機械のこと。

- (注9) Siri…スマートスピーカーの一種。音声によって機械を操作する機能を持つ。
- (注10) GPS…全地球測位システム。衛星からの信号を利用して位置情報を提供する仕組み。
- (注11) 深層学習…AIが行っている、大量のデータに基づいて人間の知能のはたらきに近づこうとする試み。
- (注12) シミュレーション…未来のことについてあらかじめ見通しを立ててみることに。
- (注13) チューニング…より良い状態になるように事態を調節すること。

問一 線①「チューリングテストと呼ばれるテスト法」とありますが、何を「テスト」するための「テスト法」でしょうか。最も

適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア コンピュータと人間の、どちらが優秀かを判断するためのテスト。
- イ 二台のコンピュータの、どちらが優秀かを判断するためのテスト。
- ウ コンピュータが人間にどれだけ追いついたかを判断するためのテスト。
- エ 二人の人間の、どちらが優秀かをコンピュータが判断するためのテスト。

問二

——線②『見分けがつく』のと『理解している』のは異なる」とありますが、この二つは具体的にどのような違いがありますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「見分けがつく」とは遠目で見ても判断できることであり、「理解している」とは知った内容を自ら応用することができ  
ることである。

イ 「見分けがつく」とは遠目で見ても判断できることであり、「理解している」とは内容を意味のあるものとして分かっ  
ていることである。

ウ 「見分けがつく」とはものごとを表面的に判断できることであり、「理解している」とは知った内容を自ら応用するこ  
とができることである。

エ 「見分けがつく」とはものごとを表面的に判断できることであり、「理解している」とは内容を意味のあるものとして分  
かっていることである。

問三

A

に当てはまることばを本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問四

——線③『できない』と考えたメンバー」とありますが、なにが「できない」と考えたのでしょうか。解答欄に合うよう  
に二十五字以内で答えなさい。

問五

B

に当てはまる体の一部を示す漢字を一字で書きなさい。

問六 — 線④「この考え」とありますが、具体的にはどのような「考え」でしょうか。「という考え。」に続くように、本文中の語を利用して三十字以内で答えなさい。

問七

C

に当てはまることばを本文中から七字で抜き出して答えなさい。

問八

— 線⑤「東ロボくんの研究」とありますが、この研究からどのようなことがわかりましたか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間の学習法に問題点があることがわかった。
- イ 人間の方がA Iより学力が高いことがわかった。
- ウ 中高生の読解力が低下していることがわかった。
- エ 人間の学力がA Iの学力に追いついたことがわかった。

問九

~~~~線 ㉑「統計的」・㉒「メカニズム」・㉓「創出」・㉔「洞察」のことばの意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

㉑「統計的」

- ア データに基づいて物事を考えるさま
- イ 簡略化された情報をもとに事実を探るさま
- ウ 計測された数値を用いてデータを作成するさま
- エ あらかじめ決められた計画に基づいて実行するさま

㉒「メカニズム」

- ア 理論
- イ 計画
- ウ 仕組み
- エ 複雑さ

㉓「創出」

- ア 事実を積み上げること
- イ 新たなものを生み出すこと
- ウ 勇気を出して研究すること
- エ 作り出されたものを見て楽しむこと

㉔「洞察」

- ア 見方を変えて解決すること
- イ 表面から中身を想像すること
- ウ 奥底にあるものを見抜くこと
- エ 暗い中で何かを掘り出すこと